「カブキ」

誘われて、歌舞伎を観にいった。

歌舞伎にはあまり詳しくない。よほど有名な演目でも、だいたいどんな話か知らない。

何かを観にいったのに話の筋がさっぱりわからない、というのは悲しい。子供のころに観た『ゴッドファーザー』がそうだった。ただでさえ私は抗争ものが苦手だ。誰がどっちの側の人間でどういう利害があって対立しているのかが覚えきれない。おまけにイタリア人は顔がみんな同じに見えて、さっき死んだはずの人がまた出てきたりした。マフィアの復讐には馬の首を使うことだけは理解した。

そんなことのなきよう、歌舞伎の前には話の筋を予習していく。それから役者の名前も頭に叩きこむ。歌舞伎役者はすぐ名前が変わるので油断がならない。

劇場に座ると、何列か前に若い白人の男性が二人座っているのに気がついた。二人とも髪を短く刈り、真冬だというのに半袖の白いTシャツを着ている。袖からのぞく二の腕が太腿ぐらい太い。

やがて演目が始まった。田舎の商人が吉原に来て花魁（おいらん）に一目惚れをする。通いつめ、とうとう身請（みう）けをするという段になって、花魁に裏切られる。そういう話だ。花魁はいま一番人気のある若手の女形がやっていて、とても美しい。

観ているうちにふと、あの白人二人組はこれがどういう話かわかっているだろうかと心配になった。イヤホンガイドで英語の解説が聞けるから大丈夫なんじゃないか。でも、たとえば「身請け」は英語でどう言うのだろう。ためしに頭の中で二人に説明を試みる。

「えー、オイランというのは高級娼婦で、あっでも娼婦といっても半分アイドルみたいなもので、でもってお茶屋というところにいるんですが、もちろんほんとにお茶を売ってるわけではなく、ネンキというものがあってですね」だめだ。これではぜんぜん話に追いつかない。脳内の二人が困ったように顔を見合わせて肩をすくめる。

私は舞台に意識を戻そうとしたが、いったん気にしてしまうと、いちいち「これはあの二人の目にどう見えるだろう」と考えるのを止めることができない。「おい見ろボブ、あれは靴なのか箱なのか？」頭の中で片方が花魁の足元を指さして言う。「それを言うならサム、彼女の頭から軍艦みたいに突き出している棒はいったい何なんだ？」もう片方も言う。「それに男はなんでみんな頭の中央部分を剃っているのだ？　宗教上の理由か？」花魁が田舎商人をこっぴどく袖にし、商人が復讐のために花魁を斬り殺すあいだも、二人がうるさくて集中できない。

一つめの演目が終わって休憩をはさみ、こんどは踊りが始まった。何列か前にいた二人組はいつの間にかいなくなっていたが、もう手遅れだ。ボブとサムはすでに私の中に入りこみ、目と脳を乗っ取ったあとだった。ボブサム目線で観る「奴道成寺（やっこどうじょうじ）」は超前衛舞踏だった。白塗りの人物が女になったり男になったり、頭を青くピカピカに塗った白装束の人々とジルバを踊ったり、かと思うとチェリーブロッサムの枝を手に襲いかかってくるショッカー的な軍団を手を触れずにばたばた倒し、そこに巨大なベル？　釜？が上から降りてきて、そのてっぺんに登ってなぜか非常に勝ち誇った様子をして終わる。ミステリアス。ファンタスティック。

それはまあいいとして、困るのは、歌舞伎が終わって何か月も経つのにボブサムがまだ帰ってくれないことだ。ときおり見慣れないものを見ては「ワオ！　これは何だ？」と説明を求めてくる。鏡餅や和式便所や御柱（おんばしら）祭について一から説明するのはとても面倒だ。

あと、半袖も何とかしてほしい。外は雪だ。今からそんなで、夏になったらどうするつもりなのか。

「七月の私」

一、

桃の季節には桃を食べる。桃ばかり食べる。

桃はおいしい。「おいしい」以外の形容詞を思いつかない。おいしいということのためだけに存在している。あまりに純粋においしいので、逆に不安になってくる。

だいたい桃は、人間にとってあんまり都合よくできすぎていないだろうか。薄皮の向こうをあんなふうに全部おいしい果肉と汁でいっぱいにして、「さあ、食べてください」と言わんばかりだ。話がうますぎる。何か裏があるとしか思えない。

おいしいに特化した果物はもちろん他にもある。たとえばイチゴ。イチゴもおいしい。しかも食べやすいようにわざわざ皮を省略し、面倒な種を小さくして、真っ赤な色でおいしいアピールをしている。食べられる気満々だ。あのヘタだって、手に持って食べやすいようにああなっているとしか思えない。

それでも桃のほうがずっと妖(あや)しい感じがするのは、もしかしたらどことなく人っぽいからだろうか。色といい形といい表面の産毛の生えた感じといい、なんとなく人間の赤ん坊に似ている。その肉を食べているような背徳の感じがあるからだろうか。

というようなことについてつねづね考えているのだが、いざ桃を前にすると、そういう理性的な思考は瞬時に蒸発してしまう。桃を食べている最中に脳内を満たしているのは、ただ桃の味と匂いと食感と、あとは「桃だ！　桃だ！　桃だ！」「うひゃひゃひゃひゃ」という自分の叫び声だけだ。桃やばい。

二、

まず底の部分を両手で包みこむようにしてそっと持ちあげ、鼻に近づけて思うさま匂いを嗅ぐ。くんかくんかくんか。しかるのち、その手をあっちに傾けこっちに傾けし、

茶器を鑑賞するようにして色や形を愛(め)でる。割れ目の絶妙さ産毛のビロード感を味わう。最後に桃を天に向かって高々と差し上げて感謝を捧げたのち、静かに元の場所に据え、軽く一礼する。これを日に数度繰り返す。

ここで初心者が注意しなければならないのは、いくら産毛が柔らかそうだからといって、頬ずりをすることは厳に慎まねばならないということだ。子供のころにうっかり桃に頬ずりをして顔が腫れた友人を私は知っている。ちなみに彼女はお中元の砂糖の丸い缶にお尻がはまって抜けなくなったこともある。

三、

桃をご神体にした桃教、というのはないのだろうか。じっさい桃を食べている時、私の脳内では千人の土民の私が巨大な桃を取り囲み、「ウラー」と言いながらひれ伏している。

いろいろ調べているうちに〈江戸時代の伝承では、桃太郎は流れてきた桃から生まれたのではなく、桃を食べたお爺さんとお婆さんが若返って契った結果生まれた〉という衝撃の事実を知るも、「桃教」の存在は確認できない。

四、

もうすぐ桃のシーズンが終わる。

別離に少しずつ自分を慣らしていくために、桃を前に置いて「もうすぐお別れだね」と言ってみる。「行かないで！」と縋(すが)りついてみる。「一生、お守りします」とかも言ってみる。

いったい何から守るというのだろう。

「会計のとき桃のパックの上に平気で物をのせるスーパーのレジ係」、だろうか。

今日もまた一つ、桃を食べた。

「父　セリフ三選」

一．「どうしてお前はそういつもいつも人の邪魔をするのだ」

実家の庭とカーポートをつなぐ細い通路があり、間に鉄の門扉がある。ある日そこにプラスチックの衣装ケースの蓋が立てかけてあった。私がまだ会社員だったころのことだ。ゴミかなと思ったので撤去した。そこで父から言われたのがこの言葉だ。

その何年か前から、庭に大きなヒキガエルが住みついていた。両手を並べたぐらいの巨大さで、体は薄茶で脇に白と黒の縞がある。グロい。だが毎年春になると同じヒキガエルがどこかから現れて、たぶん庭のどこかで越冬しているのだろう、夏の夕方に暗がりにじっとして、ときどきピュッと舌を出して虫を捕ったりしているのを見ているうちに、みんななんとなく愛着が湧いてきた。とりわけ愛着を示したのが父で、「うちのヒキガエル」などと呼んでいた。

父の一番の心配は「うちのヒキガエルが門扉の下のすき間から外に出て車に轢(ひ)かれる」ことで（前に猫を飼っていたときも「地震で飛び出して行方不明になる」ことを心配して、つねに網でつないでおくことを提案して家族から却下されていた）、例の衣装ケースの蓋はそれを防止するために父が設置したものだった。で、右のセリフ。気持ちはわからないでもないが、納得がいかない。

ちなみにヒキガエルはそれから三年ほど生きたあと、庭のくぼみの水溜まりの中で死んでいるのが見つかった。父が「怖くて触れない」と言うので私が両手ですくって地面に埋めた。皮がずるずるして気持ち悪かった。納得がいかない。

二．「小太郎は悪くない」

飼い犬に噛まれたことがある。まだ実家にいたころ、食卓に座って何か食べていたら、犬が足元に来て座った。食い意地の張った犬で、人が何か食べていると必ず物欲しげに側に寄ってきて涎（よだれ）をだらだら垂らす。無視して食べている最中に、うっかり犬の尻尾を踏んだ。犬はキャンと鳴いて飛び上がり、私の膝にがぶっと噛みついた。

膝にくっきり二つあいた牙の穴は翌日には膿み、右脚が熱をもってぱんぱんに腫れた。傷病兵のような恰好で階段を降りてくる私を見て、父が言ったのが右のセリフだ。小太郎というのは犬の名だ。

病院ではめちゃくちゃ痛い破傷風の注射を打たれたうえに、「犬の歯をもっとちゃんと磨いてやりなさい」と説教された。

小太郎が死ぬと、父は居間に遺影を飾り、毎日線香をあげて般若心経を唱え、きっちり四十九日後にやめた。

三．「ずやずやしとるな」

煮物などが柔らかすぎるときに、父はいつもこの「ずやずやしとる」を言ったが、父以外にこの言葉を使う人にいまだに出会ったことがない。方言かなとも思うが、父の田舎の親戚の人に聞いても「いや、聞いたことがない」と言う。

それでも私と妹は何となく気に入って、本人がいなくなった今でもしょっちゅうこの言葉を使う。「これ、ちょっとずやずやじゃない」「カボチャはずやずやぐらいに煮たのが好き」「なんか、ここんところの皮膚がちょっとずやずやしてきた」「ずやずや」「ずやずや」「ずやずや」

（岸本佐知子著『ひみつのしつもん』２０１９年、筑摩書房　所収）